

## 陸前高田市今泉地区復興まちづくりの核： 大肝入吉田家住宅の復元

Restoring Okimoiri-Yoshidake:  
The Core of Reconstructing Imaizumi in Rikuzentakata City

高橋恒夫

Tsuneo Takahashi

### ゼロからの出発ではない

今回の震災復興について、関東大震災や戦後の復興との大きな違いは、耐震や耐火だけではないまちづくりの反省に立って、国土交通省や文化庁は震災直後から「地域の文化遺産を活かした復興まちづくり」を提言してきたことである。

『建築雑誌』2012年4月号「特集：残されしもの、生かされしもの」の「特集を読んで」の原稿依頼を受け、2012年6月号に掲載された私の伝えたかった要点は、「震災前の痕跡や歴史、文化、技術などの文脈を住民と共に考えて共有し、丁寧につないでいければ、湾や浜ごとに個性ある歴史や文化を築いてきた三陸の町や集落が再び新しい姿で蘇るのではないか。決してゼロからの出発ではない」であった。

### 陸前高田市の今泉集落と 大肝入吉田家住宅

それから4年半が経過し、三陸の町や集落の復興の姿が少しずつ見えてきたが、「地域の文化遺産を活かした復興まちづくり」の提言とは、ほど遠い現実に直面し、歴史や文化を継承したまちづくりの難しさをあらためて感じている。被災地最大の復興計画が進んでいる岩手県陸前高田市でも例外ではないが、そのような状況のなかでの取り組みを紹介したい。

陸前高田市は、東日本大震災で街そ

のものが消滅するというまさしく壊滅的な被害を受けたが、私にとっては四十年近く調査・研究を続けてきた気仙大工を数多く輩出したところでもある。市域の西部を流れる気仙川岸に形成された今泉集落も河口に近かったこともあり、津波で全滅してしまった。今泉集落は藩政期を通じて気仙郡の郡政の中心地で、南北の街道は途中で4回鍵型に屈折させ、北には神社、南には寺院と足軽屋敷を配置していた。また、集落のほぼ中央の少し西側奥の区域は仙台藩領内で本格的な大肝入屋敷形態を残す最後の遺例として貴重だった吉田家住宅（岩手県指定文化財）や代官屋敷などの行政施設が集中していたところで、ここは藩政期に計画的に整備された地方町場集落の全体像を知ることのできる興味深い町であった。しかし、今回の津波で、集落内のほとんどの建造物は流出し、破壊されてしまったが、震災前に豊富な資料の調査やその研究が蓄積されてきたところである。

### 今泉集落の模型製作と 『よみがえる陸前高田市の 今泉集落』の刊行

今回の震災で江戸時代の今泉集落の痕跡が、大きく失われたこと、さらに2000年に製作し、陸前高田市立博物館へ寄贈した「江戸時代今泉集落町場中心部模型」の流失を受けて、中心部だけ

ではなく今度は今泉集落全体を模型で残り、江戸時代今泉集落の全体像を今後とも記憶にとどめてもらおうと考えた。同時に、これからの今泉の復興まちづくりにも、その歴史や文化を継承してもらいたいという期待を込めて、学生と共に「今泉集落全体模型」を2013年1月までに完成させた。

一方、2011年～2013年に「陸前高田市における歴史・文化遺産を活用した復興計画委員会」と「陸前高田市文化財等保存活用計画調査委員会」の各委員会へ参加した。この間に私が提出した委員会資料なども含めて、『よみがえる陸前高田市の今泉集落 流失前の調査と復興活動の資料集』として、一冊にまとめ、昨年7月に刊行することができた。

以上のような成果は、流失した今泉集落にとって、歴史を目に見える形にしたので、その重要性はさらに高まり、記録にとどめ後世に今泉集落の歴史と文化を正確に伝えるツールとして、また、今後直面する今泉地区のまちづくりや大肝入吉田家住宅の復元プロジェクトのベースになるものと確信している。

### 今泉地区復興まちづくりの核・ 大肝入吉田家住宅の復元

岩手県陸前高田市で進む町並み再建計画は、大きく高田地区と今泉地区に分かれるが、前者は高上げ地へまったく新しい街並みとして計画が進んでいるのに

東北工業大学名誉教授 / 1948年生まれ。  
東北工業大学卒業。博士（工学）。日本建築史。著書に『気仙大工・東北の大工集団』『近世在方集住大工の研究』。



図1 震災前の大肝入吉田家屋敷



図2 江戸時代今泉集落全体模型(中央奥に大肝入屋敷・右側に鍵型街道)

対して、後者は藩政期から続く町割と気仙大工が築いた建物が残る伝統的な町並みで知られ、歴史遺産が多く、その復興の課題は大きい。なかでも大肝入屋敷「吉田家住宅」は、「大庄屋(おおじょうや)」と呼ばれ、同地区の象徴的な存在であったので、その対応が目まぐるしくなっている。

2011年12月に承認された「陸前高田市復興計画」では、これまで培われ、築かれてきた歴史・文化を受け継ぎ、大肝入屋敷や街道の復元など、地域特性や景観に配慮したまちづくりを進めることにした。しかし、その復興計画では、甚大な被害をもたらした津波による被害を二度と出さないために、今泉地区を8m嵩上げする整備計画が立てられている。同地区の住民のなかには「まちの景観が変わるので、嵩上げには抵抗感があります」と復興まちづくりへの思いを打ち明ける声もある。確かに歴史や文化を育んできた、その舞台とも言える土地が8mの地下に埋まることは、大きな打撃である。そのような状況において今泉集落の継承

すべき最重要ポイントは、嵩上げされても大肝入吉田家住宅と鍵型街道は震災前と同じ位置での復元を目指すことであると主張してきた。行政側は当初は両者とも復元はするが、その位置についてはあまり重要視していない考えのようだった。そこで震災前の位置での大肝入吉田家住宅と鍵型街道の復元の意味、すなわち、この二つのキーポイントから初めて藩政期から震災前まで続いてきた今泉集落の形態をイメージできること、それ以外の場所で復元されても意味がないことを何度も各種協議会で説明してきた。その結果、大肝入吉田家住宅はほぼ当初の位置で復元され、また、鍵型の街道も北側の一部だけではあるが、ほぼ震災前と重なるようにすることで計画が進んでいる。

今回の東日本大震災での復興において、歴史や文化を受け継ぐまちづくりの難しさのなかで、嵩上げされても、集落のほぼ元の位置に鍵型街道を形成し、大肝入吉田家住宅が再び元の位置に気仙

大工の総力を挙げて復元再建された暁には、まさしく復興のシンボルとなるであろう。さらに大肝入吉田家住宅については回収部材を使用した復元計画を進め、岩手県指定文化財の継承を目指している。いずれにしてもこれらの貴重な歴史遺産の継承は、後世に伝える意義は極めて大きいと言える。そして、今泉集落の模型と資料集は、今度は震災前の集落をより具体的に確認できる役割を担うであろう。

一方、象徴的な大肝入吉田家住宅の復元によって、周辺の整備が進むことも期待できる。地区住民もそれを強く望んでいるようである。このようなことが着実に進めば、今泉地区へ戻る世帯数も確実に増加するであろう。

参考文献

- \*A 高橋恒夫『近世在方集住大工の研究』(中央公論美術出版、2010)
- \*B 高橋恒夫『気仙大工——東北の大工集団』(INAX出版、1992)



図3 『よみがえる陸前高田市の今泉集落』表紙



図4 鍵型街道と大肝入吉田家屋敷跡(手前)



図5 大肝入吉田家住宅復元イメージ